

国立国語研究所学術情報リポジトリ

関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及の背景

著者	三井 はるみ
雑誌名	首都圏言語研究の視野：首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書
ページ	153-164
発行年	2014-02-25
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；13-02
URL	http://doi.org/10.15084/00002727

関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及の背景¹

三井 はるみ
(国立国語研究所)

1. はじめに

現代共通語の中に、関西方言出自の要素があるということはよく知られている。「けむり（煙）」「うろこ（鱗）」「ひまご（曾孫）」「つゆ（梅雨）」等の語彙や、待遇表現などが例として挙げられる。「～てほしい」は、そのような関西方言出自の形式の一つである。

現代共通語、現代標準日本語は東京・首都圏の方言を基盤として成り立っているが、両者は一致するわけではない。関西方言出自の形式が共通語として取り入れられる際に、東京・首都圏の方言がどのような動向を取り、役割を果たしたか。これを具体的に明らかにすることは、共通語の形成過程だけでなく、地域言語である東京・首都圏方言の特質を解明する上でも、有効な観点の一つであると考えられる。

筆者は三井（2007・2010）において、関西方言出自の「～てほしい」が全国共通語として普及・定着していく過程を確認した。そこでは、主として時期と対象の異なる3回の全国調査と、文献調査の結果を用いて、「～てほしい」が、地域的にも文体的にも使用範囲を拡大していく様子を提示した。これを受けて本稿では、従来用いられていた類義表現である「～てもらいたい」に代わって（あるいは、加えて）、新たに「～てほしい」が用いられるようになった背景について、特に、東京・首都圏方言における受納表現「～てもらう」の用法の変容という観点から考察を行う。

以下、2節で前稿（三井（2007・2010））の要旨を紹介する。3節で、「～てほしい」普及の背景をさぐる観点を示す。4節で、受納表現の補助動詞用法「～てもらう」の全国的な地域差を三点挙げ、5節でそのうち、「受益明示の積極性」について、6節で「待遇表現的使用」について概観する。7節で、「～てもらう」の地域差とその変容についてあらためてまとめ、8節で「～てもらう」の待遇表現的使用と「～てほしい」の普及の関係について仮説を述べる。

2. 前稿で明らかになったこと

はじめに、三井（2007）、三井（2010）の要旨を示す。一部、その後の追加調査に触れる。

2. 1 三井（2007）

「～てほしい」は、方言としては、GAJ段階で近畿地方に限定的に使用される語形であったこと、書きことばとしては、近現代の文学作品全体で、「～てもらいたい」より少ないものの、広く用いられており、増加傾向にあることを示した。

（1）GAJでは、「～てほしい」は明確に近畿地方中心に分布する語形である。

国立国語研究所編（2002）『方言文法全国地図 第5集』（GAJ5）第231図「行ってもらいた

¹ 本稿は、共同研究発表会（2011年2月25日、国立国語研究所）における口頭発表「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及とその背景」の一部に加筆したものである。

い」によると、「～てもらいたい」類が、沖縄県を除く全国に広く分布するのに対し、「～てほしい」は、明らかに近畿地方を中心とした地域にのみ分布している。GAJの調査は1979～1982年実施。対象者は、主として、大正9（1920）年以前生まれの生え抜きの男性、各地点1名である。この時点で、明治末から大正生まれの人々の日常の話しことばでは、「～てほしい」は「～てもらいたい」と異なり、近畿地方を中心とした地域性を帯びた語形であった。

（2）近現代の文学作品では、「～てほしい」と「～てもらいたい」はどちらも広く用いられている。

CD-ROM 版新潮文庫4種（新潮社1995,1997a,1997b,2000、翻訳作品を除く）を資料として、「～てほしい」と「～てもらいたい」の出現状況の調査を行い、著者別、著者の生年順に出現数を整理した。近現代全体では、3,572例のうち、「～てほしい」が1,418例（39.7%）、「～てもらいたい」が2,154例（60.3%）であった。2対3の割合で、どちらも広く用いられていると言える。著者の出身地による偏りは、少なくとも単純な用例数の違いとしては現れてこない。これらの点から、近現代の書きことばにおいては、「～てほしい」は「～てもらいたい」とともに共通語形として用いられているとみて問題ない。

（3）近現代文学作品では、大局的には、「～てほしい」が増加傾向にある。

（2）の結果からは、大局的に見て、生年の早い著者には「～てもらいたい」が多く、生年の遅い著者には「～てほしい」が多い、という傾向が見て取れる。また、概ね1926（昭和元）年生まれあたりを境に「～てほしい」が全体的に多くなる。このことは、共通語としての「～てほしい」の使用が盛んになったのは戦後であるとする研究者の観察や、GAJの分布（話者は主として1920年以前生まれ）とも矛盾しない。

なおその後、追加調査として、現代の多様な書きことばでの実態を見るために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用状況を検索した（「少納言」を使用）。それによると、全体12,138例のうち、「～てほしい」8,909例（73.4%）、「～てもらいたい」3,229例（26.6%）であった（ただし、不要例除去前の暫定値）。近現代全体の割合と逆転し、「～てほしい」が四分之三を占めている。近現代を通して確認された、書きことばにおける「～てほしい」増加の傾向は、現代において、「～てほしい」が「～てもらいたい」を凌駕するまでに定着していると見ることができる。

2. 2 三井（2010）

GAJの30年後の分布追跡調査の結果から、「～てほしい」の分布域が、近畿地方を中心に東西に拡大していること、若年層では「～てほしい」と「～てもらいたい」の勢力が完全に逆転し、「～てほしい」が全国に広がったことを示した。

（4）GAJの30年後、「～てほしい」は、近畿地方を中心に東西に広がったが地域性を保持している。

GAJ調査実施約30年後の2009年に実施した、同一調査文による分布追跡調査の結果によると（国立国語研究所「方言分布」プロジェクトで実施）、依然として、「～てもらいたい」類が沖縄県を除く全国に広く分布するのに対し、「～てほしい」の分布は、近畿地方を中心とした本土の中央部に限られている。ただし、GAJでは使用地域ではなかった、西側の徳島市、東側の長野

県松本市，東京都立川市に使用地点が現れており，この 30 年間に周圏論的拡大が生じたことがわかった。話者は 1939（昭和 14）年以前生まれの生え抜きの男女である。

（５）現代の若年層では「～てほしい」が全国的にひろがり，「～てもらいたい」は減少した。

2008 年に実施した，若年層（20 歳前後の大学生）を対象とした全国調査によると（国立国語研究所「方言分布」プロジェクトで実施），「～てほしい」が全国に広がり，「～てもらいたい」は東日本を中心として地点もまばらに見られるのみになっている。回答者数は，「～てほしい」142 名（81.6%），「～てもらいたい」32 名（18.4%）。（４）の話者との年齢差は約 50 年である。この 50 年間（ただし見かけ上の時間）で「～てもらいたい」は退縮し，「～てほしい」は急速に全国に広がって「～てもらいたい」に取って代わった。（４）の段階で「～てほしい」は東京に入っている。東京で使われ始めたことから，マスメディア，ネットメディア等によりやすくなり，全国で人々の耳目に触れる機会が増えて全国に一気に広まった，と考えられる。

なお，現代の標準語スタイルの話しことばにおける実態の一端を見るために、『日本語話し言葉コーパス』「コア」部分（手作業による精密な形態素分析が施された 100 万語程度のテキスト。講演 370 件，収録時間約 83 時間）における使用状況を検索した。それによると，全体 74 例のうち，「～てほしい」56 例（75.7%），「～てもらいたい」19 例（25.7%）であり，ここでも，「～てほしい」が「～てもらいたい」より優位であった。

以上の調査結果を，スタイル，時代，地域に着目して図式化して示すと，次のようになる。網掛け部が「～てほしい」の分布を表す。「～てほしい」は，明治時代以来，量的にも地理的にも拡大し，現在では「～てもらいたい」に代わって優勢となっている。スタイル，使用地域の両面で，共通語としての地位を確立したと言える。

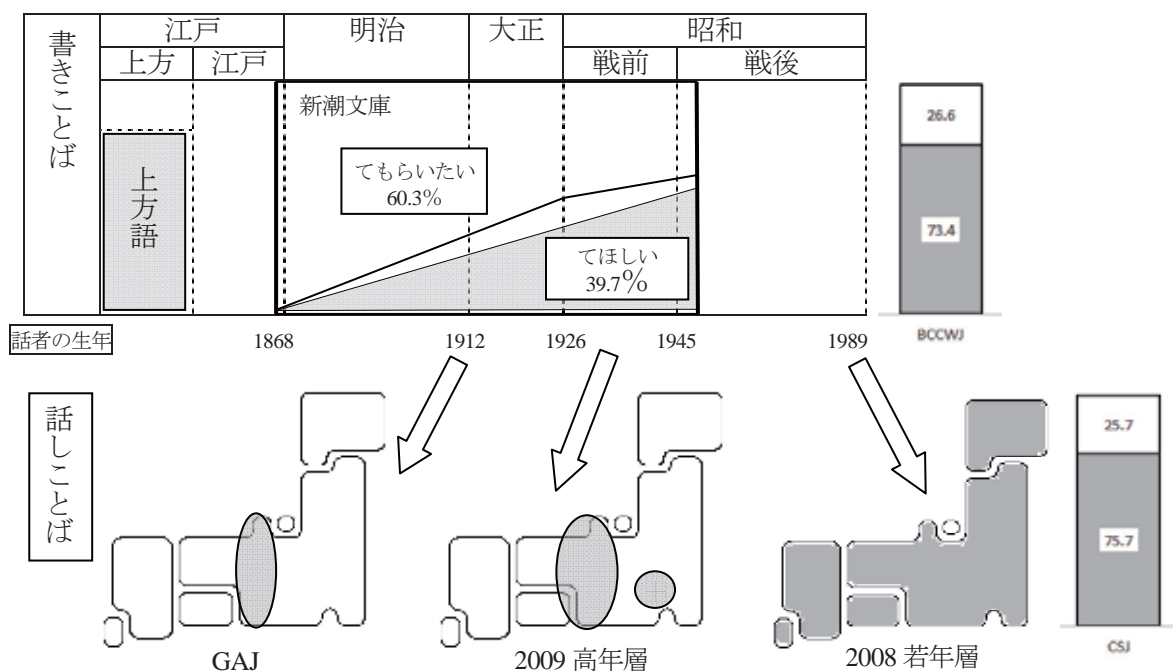


図 1 「～てほしい」の分布

3. 「～てほしい」進出の背景をさぐる観点

2節では、「～てほしい」という形式について

- ・ 関西方言を基盤とする。
- ・ 書きことばでは、近現代を通して使用が増加し、昭和の時代に共通語として定着した。
- ・ 話しことばでは、近年、東京から全国に拡大、浸透し、地域差なく使われるようになった。

という、共通語としての普及、定着の事実を提示した。

残された大きな問題は、このような事実があるとして、なぜ「～てもらいたい」という形式があるところへ、新たに「～てほしい」という形式が加わり、拡大していったか、ということである。

これについてここでは、「～てほしい」そのものではなく、その類義表現である「～てもらいたい」の方に、さらにその構成要素である「～てもらおう」という形式の用法に動因を求める方向から考えてみたい。結論を先に述べると、「～てもらいたい」の含意する、「自分が人から恩恵を受けることを希望する」という意味が待遇的ルールに抵触し、特に、「～てもらおう」を待遇表現的に頻用する近畿方言や、近年の東京・首都圏方言では、その違反に敏感になっていて、「～てもらいたい」の使用を回避、それに代わる形式として「～てほしい」を使用するようになった、という仮説を提出する。

「～てほしい」の発生と拡大の過程には、いくつかの局面がある。まず地理的な拡大と文体的な拡大がある。地理的な拡大については、そもそも上方語で「～てほしい」が発生した段階、それが地理的な連続性の中で広がった段階、東京・首都圏でも使われるようになった段階、東京を発信源として全国に拡大した段階の、少なくとも四つの段階が考えられる。このうち、以下で取り上げるのは、地理的な側面のうち、主として、関西で「～てほしい」が先行発生したことで、東京・首都圏で「～てほしい」が使われるようになったことに関連すると思われる部分である。

なお、「～てほしい」の進出と、「～てもらいたい」の退縮の理由については、用例を精査して、現在類義関係として扱っている「～てもらいたい」と「～てほしい」の意味用法の異同を検討することで、何らかの手がかりが得られる可能性がある。この点については、今は大きな課題として捉えておき、別に分析を行うこととしたい。

4. 「～てもらおう」の用法の全国的地域差

「～てもらおう」の待遇表現的使用（実際の恩恵関係を拡張して待遇表現的に使用する用法）が、「～てもらいたい」の退縮と「～てほしい」の普及に関係しているという可能性を検討するために、まず、「～てもらおう」の用法全般の全国的な地域差を概観しておく。

先行研究の指摘と調査結果を統合すると、受納動詞「もらう」の補助動詞形式「～てもらおう」の用法は、次の三点に全国的な地域差があるとまとめられる。

- (1) 琉球方言の多くには「～てもらおう」にあたる補助動詞用法がない。
- (2) 恩恵的な行為を受けることを述べる場合、「～てもらおう」によって受益を明示することとどの程度積極的であるかには方言差がある。(受益明示の積極性)

- (3) 実際には恩恵を受ける行為ではないにもかかわらず、待遇表現として語用論的に「～てもらう」を用いる程度には方言差がある。(待遇表現的使用)

(1) は、形式の存在自体に関する地域差である。多くの琉球方言では、授受動詞を用いた「～てやる」「～てくれる」にあたる補助動詞用法はあるのに対し、「もらう」にあたる動詞には補助動詞用法がない(島袋・かりまた 2001, 三井 2002a:70 左)。『方言文法全国地図』第5集 231 図「行ってもらいたい」で、沖縄に無回答の地点が多いのは、このためである。

逆に、琉球以外の本土方言では、「～てもらう」という形式は存在している。(2) と (3) はその中での用法差である。

5. 受益明示の積極性

5. 1. 「～てもらう」による受益明示の積極性とは

(2) として、「恩恵的な行為を受けることを述べる場合、「～てもらう」によって受益を明示することにどの程度積極的であるか」という方言差が挙げられる。これを「受益明示の積極性」としておく。「～てもらう」は、「Aガ Bニ Cテモラウ」という構文をとり、Bが授与動作の動作主、Aが授与動作の受け手で、CはAにとって望ましい事態(Aにとって恩恵性、受益性のある事態)であるという特徴がある。共通語では、Cが望ましい事態であれば必ず「～てもらう」を使うわけではないが、しかし、「～てもらう」を使わないと非常に不自然な場合がある。「～てもらう」と構文的に置き換え可能なのは、受身の助動詞「～(ら)れる」による受動構文である。

5. 2 受益を必ずしも明示しない方言

まず、方言によっては、共通語では「～てもらう」を用いないと不自然であるような、受け手にとって恩恵性のある事態の場合に、受動構文が用いられることがある。次の例は、岩手県江刺市(現 奥州市江刺区)方言の例である(国立国語研究所 1981, 表記と共通語訳を改変)。共通語では「～てもらう」が自然で、受身の助動詞は不自然であると思われる箇所に、受身の助動詞「～(ラ)イル」が現れる。

- ① イズズノ ドギダッタァ マダ ワラシダガラ ソノコロ オラ マジェライネノス。
(5歳の時だったと思うが、まだ子どもだから、その頃は私は〔仲間に〕入れてもらえないのです。
[? 入れられないのです]) (1912 生 f, p.32)
- ② チーセ ワラシダズ サギニ ダシ ヤットギヤ カサ ミンナ アズゲンノ。アド
オッキノ ネグナットネ カサ サスノ ネグナンダオネ ワラシチジ イッペダガラ。
ドーロイデ アラ アノヒトサ イレライデゲ ナーンテ(小さい子どもたちを先に出してやるときは、傘をみんな持たせるんだ。そして大きい子どもの〔分が〕なくなるとね、傘さすのなくなるんだよね、子どもたちがたくさんいるから。道路に出て「あれ、あの人に入れてもらって」[? 入れられて] 行け」なあんて) (1912 生 f, p.56)

①は、「子どもの時遊びの仲間に入れたかどうか」という話題である。共通語では「入れてもらえない」と「～てもらう」を用いるのが自然な文脈であるが、この方言では、使役の助動詞(ラ

イル)を用いて「マジェライネ」としている。②は、「雨が降っているが子どもの傘がない」という場面である。共通語では、「入れてもらって」と言うところであろうが、この方言では、やはり使役の助動詞を用いて「イレライデ」としている。このように江刺方言では、「遊びの仲間に入れてもらう」とか、「傘に入れてもらう」といった、動作の受け手がその動作によって恩恵を受ける場合でも、「～てもらう」によって受益性を表現することが必要ではなく、受身の助動詞で表現することが可能である。(ただしこの方言にも「～テモラウ」という形式はあり、受益的な場面での用例もある。三井 2002b)

このような、動作の受け手にとって恩恵性のある事態であっても、必ずしも「～てもらう」によって受益を明示しない方言は、東北方言や九州方言に広く見られる(日高 2007)。

5. 3 受益を積極的に明示する方言

逆に、共通語では「～てもらう」を用いないことが可能な文脈で、積極的に「～てもらう」を使う方言もある。

日高(2007:65-70)は、平井・徳川編(1969)と徳川(1981)に採録された、夏目漱石『坊っちゃん』冒頭部分の各地方言訳を整理して、原文では授受表現が行われていないが授受表現も文脈的に可能な部分について、各地方言での訳出のされ方を検討した。対象とされた箇所のうち、原文では単純な動詞形で表現されている「小使に負ぶさつて帰つて来た時」の下線部について、原文にはない授受表現「～テモラウ」類を用いて訳出しているのは、全国の中で、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫、奈良県、和歌山県の近畿地方とそれに連続的な地域である香川県、高知県であった。具体的な語形は以下のとおり。

オンデモーテ(三重県伊勢市)、オテモオテ(滋賀県大津市)、オオテモロテ(京都市)、セオテモロテ(大阪府堺市)、オタシテモウテ(兵庫県神戸市)、オーテモロテ(奈良県桜井市)、オッパシテモウテ(和歌山市)、オウテモロテ(香川県丸亀市)、オーテモローテ(高知市)これらは、「～テモラウ」を用いて、自分が恩恵を受ける立場であることを積極的に明示しているものと見ることができる。

以上の傾向をまとめると、「～てもらう」による「受益明示の積極性」に関しては、東北方言や九州方言では「～てもらう」を用いることが少なく、逆に近畿方言は受益の表出に積極的であり、共通語、あるいは、東京・首都圏のことばは中間的である、と位置づけることができる。

6. 待遇表現的使用

6. 1 「～てもらう」の待遇表現的使用とは

次に(3)「実際には恩恵を受ける行為ではないにもかかわらず、待遇表現として語用論的に「～てもらう」を用いる程度には方言差がある」という点について見ていく。これを「待遇表現的使用」としておく。近年、共通語、あるいは、東京・首都圏のことばにも見られる、次のような例がこれにあたる。

③ お荷物持たせてもらいます。(申し出)

④ そこを左に曲がってもらって…(道教え)

⑤ ご住所、書いてもらっていいですか。(指示)

⑥ 本日は、休業させていただきます。(告知)

③のように「(自分が相手のために相手の) 荷物を持つ」、④のように「(相手が相手の行きたいところに行くために) 左に曲がる」ことは、事実としては、話し手が恩恵を受ける行為とは考えにくい(沖 2009)。それにもかかわらず「～てもらう」を用いて表現するのは、相手の行為によって恩恵を受けているかのように表出することが、一種の待遇表現として機能するためと考えられる。

⑤⑥は、共通語の「問題敬語」として取り上げられることのある表現である。⑤は、「指示」として発話される場合、「住所を書く」ことが話し手の直接の利益となるとは限らないし(「いいですか」という許可求めの対象にも本来ならない)、⑥の場合のような「させていただく」表現(「いただく」は「もらう」の謙譲語形)が、本来の聞き手の「許しを得て」行う行為への適用から拡大して、ある種の謙譲表現として多用されるようになってきていることについては、多くの議論と論考がある(例えば、菊池 1997、井上 1999)。

6. 2 待遇表現的使用の活発な関西・近畿方言

「～てもらう」の待遇表現的使用には地域差があり、関西・近畿で盛んであることが、いくつかの調査結果に表れている。

6. 2. 1 『方言文法全国地図』申し出表現「持ちましょう」

図6は、『方言文法全国地図』第6集320図「持ちましょう」(B場面)の略図である。「その荷物は私が持ちましょう」と言うときの下線部の言い方について、「この土地の目上の人にむかってひじょうにいていねいに」という場面設定(B場面)でたずねている。図6では、「持たしてもらいます」類の回答のみをピックアップしてプロットした。この言い方が、近畿地方を中心に分布し、その影響の強い中国、四国方面にも広がっていることがわかる。

6. 2. 2 関西科研 道教え談話

陣内(2003)には、7地域(東京、名古屋、大阪、広島、高知、福岡の6都市と、徳島)における、2場面(親しい友人に〈親〉、見知らぬ人に〈疎〉)の、「地図を見ながら駅までの道を説明する談話」が、10～70代の男女、計30名分収められている。この談話の中の「左に曲がる」という指示をする箇所、次のような例が見られる。

⑦ 大阪・20代・男

- ・1本目の道を一、左に曲がってもらって一。公園がありますんで一。〈疎〉
- ・その前の道、左に曲がって行ったら公園があるから。〈親〉

⑧ 徳島・20代・女

- ・最初の角を左に曲がってもらって一、って、郵便局、右側に郵便局、左には銀行が見えます。〈疎〉
- ・最初の曲がり角を左に曲がって一、って、右に郵便局、左に銀行があるけん、〈親〉

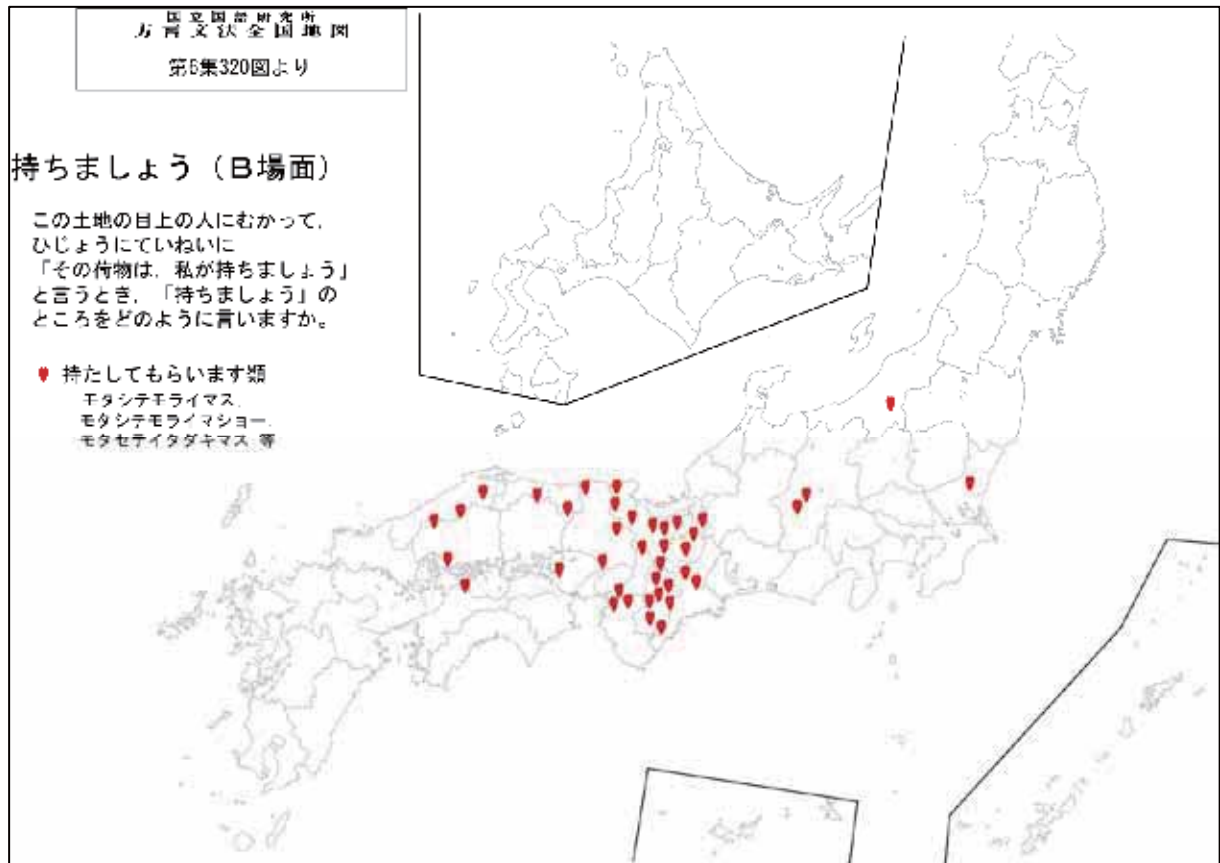


図2 「持たしてもらいます」類の分布

6. 1④で述べたように、ここで、相手が自分の行きたい目的地へ行くために道を左に曲がることは、別段、話し手に恩恵をもたらす行為ではない。それにもかかわらず、「～てもらう」によって恩恵を被る立場にあるかのように表現することで、仮想の恩恵の与え手である聞き手を目上に待遇する効果が生まれていると見ることができる。「～てもらう」を使った表現が、「見知らぬ人」に対する談話に現れ、「親しい友人」に対しては現れないことから、この形式の持つ敬語的効果がうかがわれる。

「～てもらう」に対応する謙譲の敬語形式である「～ていただく」を用いた回答も見られる。

⑨ 大阪・40代・女

- ・左の方に、曲がっていただいたら、右に郵便局、左に銀行の、三叉路があります。〈疎〉
- ・そこを左に曲がったら、郵便局が右手の方で、左手の方に銀行がある、三叉路になってるところがあるやんかー。〈親〉

⑩ 広島・40代・男

- ・その郵便局と銀行の間を左にまがっていただいて、それずーとまっすぐいっていただくと 〈疎〉
- ・その銀行と郵便局の間を左に曲がってずっとまっすぐいきよったら、〈親〉

「～ていただく」は、もちろん、「親しい友人」相手の場面には現れないが、かといって、「親しい友人」に対して、その非敬語形式である「～てもらう」が現れるわけではない。このことから

も、「～てもらう」は、形式としては敬語ではないが、機能としては敬語的な働きを持つと見ることは妥当であると考えられる。

このような「～てもらう」の待遇表現的使用は、7地域のうち、名古屋、大阪、広島、福岡、徳島に見られる（すべて「見知らぬ人」相手の場面）。東京、高知には見られない。ここからも、関西、および、近畿圏の影響の強い地域で、「～てもらう」の待遇表現的使用が盛んであることがわかる。

6. 3 東京・首都圏方言の場合

これに対して、東京・首都圏方言、あるいは、共通語では、近年まで「～てもらう」の待遇表現的使用は活発ではなかったと考えられる。しかし、近年この用法が目立つようになってきており、そのことが、違和感とともに話題として取り上げられることが少なくない。

例えば、よく知られていることであるが、「～ていただく」を含む「させていただく」については、次のような観察がある。

⑪ 北原：「…させていただく」というのは、これはどうなんですか。戦前よりも戦後のほうが、非常に増えているでしょうね。

大石：「…させていただく」の発想は関西ですね。関西の「…させてもらう」。

奥山：「もらう」ということばは、関西のことばですね。あれを翻訳して、「いただく」になったわけですね。

大石：ですから、はいったのはいつか知らないですが、戦後東京では盛んに使われるようになったといわれているんじゃないですか。

奥山：「本日休業させていただきます」。これは、私は三代目の江戸っ子なんですけれども、少なくとも戦前は言わなかったことばですね。

戸塚：言わないですね。「本日休業仕り候」。

大石：「…させていただく」がピッタリするような場合も、もちろんありますけれどもね、「…させていただく」とまで言わなくたっていいじゃないか、と思うような言い方がありますね。

（奥山益朗・北原保雄・沢田允茂・戸塚文子・大石初太郎〔司会〕（1973）「座談会：現代敬語の問題と敬語の将来」『敬語講座6：現代の敬語』明治書院，pp.217-243）

事実の確認は別に行うべきであるが、少なくとも語感として、1918（大正7）年東京生まれの奥山氏、1913（大正2）年生東京生まれの戸塚氏が、「戦前は言わなかった」という評価をしている点に着目しておきたい。時期ということで言うと、「してもらっていいですか」という表現が取り立てられるようになったのは、さらに近年のことである（例えば、砂川2005）。

7. 「～てもらう」の用法の地域差とその変容についてのまとめ

4～6節の概観をもとに、「～てもらう」の用法の地域差とその変容について概略的に示すと、次の表のようになる。

表 「～てもらう」の用法の地域差と変容

	琉球	東北・九州	東京・首都圏	関西・近畿
(1)「～てもらう」形式の存否	×	○	○	○
(2) 受益明示の積極性		—	+	++
(3) 待遇表現的使用		—	— ⇨ +	++

琉球方言は、「もらう」にあたる受納動詞の補助動詞用法を持たない。この形式を持つその他の本土方言の中で、東北方言や九州方言は、「～てもらう」で受益を明示することに積極的ではなく、「～てもらう」を待遇表現的に使用することもない。「～てもらう」の使用自体が不活発である。一方、関西・近畿方言は、「～てもらう」で受益を明示することに積極的であり、待遇表現的使用も極めて活発である。東京・首都圏はその中間で、「～てもらう」で受益を明示することはほぼ義務的だが、待遇表現的な使用は活発ではなかった。しかし近年、待遇表現的使用が目立つようになってきている。

この地域差の状況は、一つには、「かつての中央語圏であった近畿地方とその周辺地域では授受表現の使用度（定着度）が高く、かつての周辺地域であった東日本と九州地方では比較的授受表現の使用度（定着度）が低い」「東京に見られる授受表現は、敬語表現と同様、近畿圏からの表現体系の移入」（日高 2007:70）という、授受体系一般の発達過程を反映したものと見ることができる。一方、発達過程として見た場合、三つの用法は、(1)→(2)→(3)の順で生じたと解釈される。(1)が語形の発生、(2)が字義に忠実な使用の定着であるのに対し、(3)は用法の拡張である。

この用法の拡張が、待遇表現的な使用という方向に生じていること、それが、近畿地方を中心とした地域で先行し、東京・首都圏地域が追随していることは注目される。待遇表現的使用は、恩恵性という意味特徴を含意する授受表現の性質から必然的に発生しうる変化、と捉えることもできるが、それだけでなく、発生・変容の下地として、小林・澤村(2010)が指摘するような「言語的発想法」の地域差を考慮に入れるべきであろう。すなわち、近畿地方を中心とする地域は、「配慮化」（ことばで相手に気遣いを表す）という点で積極的な地域であるとされるが、そのような発想法が、「～てもらう」の待遇表現的使用の発達を促した、という考え方である。

小林・澤村はさらに、「配慮化」他の7種の言語的発想法について、「近畿を中心とした西日本、および関東」はそのような発想法が強く、「東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本」はそのような発想法が弱い、という、大きく対立する二つの地理的類型を提示した上で（小林・澤村 2010a）、前者に「関東」が含まれる点について、都市化という共通の要因を指摘し、歴史的には、「急激な都市化に伴い、「配慮化」という言語的発想法が俄かに意識的になってきた江戸市民が、必要に駆られて上方から取り込んだ」言語的現象が存在することを示唆している（小林・澤村 2010b）。現在、東京・首都圏方言で進行している「～てもらう」の待遇表現的使用の増加は、現代においても、言語的「配慮化」の受容を満たすために（あるいはその要求とマッチするがゆえに）、東京・首都圏の人々が、近畿（関西）方言の表現法を率先して取り入れていることを示すものとも見られ、興味深い。

8. 「～てほしい」の普及の背景としての「～てもらう」の待遇表現的使用

以上を受けて、「～てもらう」の用法、とりわけ、待遇表現的使用の地域差と変化が、「～てもらいたい」の衰退と「～てほしい」の進出・普及に間接的に関与しているのではないか、という仮説を述べる。

「～てもらいたい」は、「自分が人から恩恵を受けることを希望・要求する」という意味を含意し、形式上も明示する。しかしこの「受益を要求する」という言語行動は、内容上、待遇的ルールに反する場合があります。特に、「～てもらう」の待遇表現的使用が盛んであるほど、その違反には敏感であると予想される。そこに、「～てもらいたい」の使用を回避したいという動機が生まれ、代替表現として「～てほしい」が選択され、多用されるようになったと考えてみたい。「～てもらう」の待遇表現的使用が盛んな近畿地方で、「～てほしい」が早く定着し、次いで待遇表現的使用が増えつつある東京・首都圏で、「～てほしい」が受け入れられた、という順序は、この考え方と矛盾しない。

このアイデアが妥当なものであるかどうか、待遇表現体系からの検討をはじめ、具体的な詰めを行っていくことが必要であると思う。本動詞用法の「(プレゼントを) もらいたい」と「(プレゼントが) ほしい」の異同との平行性や、「～てもらう」の有する使役につながる働きかけ性の影響等、文法的意味の面からの考察も必要だろう。

関西方言由来の形式が、共通語に取り入れられるにあたっては、東京・首都圏方言という地域言語の中に、それを受け入れる何らかの素地が備わっているのではないか。ここではそのような観点からの一つの仮説として、提示するものである。

文 献

井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』 講談社現代新書。

沖裕子 (2009) 「発想と表現の地域差」『月刊言語』38(4), 16-23.

菊地康人 (1997) 「変わりゆく「させていただく」」『月刊言語』26(6), 40-47.

国立国語研究所 (1981) 『方言談話資料5』 秀英出版 (http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogendanwa_siryo/01/, 2014年1月24日閲覧)

国立国語研究所 (2002) 『方言文法全国地図5』 国立印刷局 (http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html, 2014年1月24日閲覧)

国立国語研究所 (2006) 『方言文法全国地図6』 国立印刷局 (http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html, 2014年1月24日閲覧)

小林隆・澤村美幸 (2010a) 「言語的発想法の地域差と社会的背景」『東北大学文学研究科研究年報』59, 162(71)-127(106).

小林隆・澤村美幸 (2010b) 「言語的発想法の地域差と歴史」『国語学研究』49, 73-86.

島袋幸子・かりまたしげひさ (2001) 「琉球方言のやりもらい動詞」『月刊言語』30(5), 62-63.

新潮社 (1995) 『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』, (1997a) 『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』,

- (1997b)『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』, (2000)『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版 100 冊』
陣内正敬 (2003)「関西科研 道教え CD-ROM」科研費基盤(B)「コミュニケーションの地域性と
関西方言の影響力についての広域的研究」
砂川有里子 (2005)「ご住所書いてもらっていいですか」『続弾 問題な日本語』大修館書店, 84-89.
日高水穂 (2007)『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房.
松本修 (2008)「東京における「させていただく」」『国文学』92, 355-367.
三井はるみ (2002a)「231 図 行ってもらいたい」国立国語研究所『方言文法全国地図解説 5』国
立印刷局, 66-74.
三井はるみ (2002b)「気づかない方言の方言学 一対照方言学的研究の出発点として一」日本方
言研究会編『21 世紀の方言学』国書刊行会, 257-267.
三井はるみ (2007)「要求表現形式「～てほしい」の共通語としての定着」『日本語学』26(11),
102-110.
三井はるみ (2010)「方言と共通語のはざままで」『三色旗』752, 15-21.